

豊臣秀吉ゆかりの庭—桃山時代—

(公財) 京都市埋蔵文化財研究所 近藤 章子

はじめに

庭園の歴史的な流れとして、平安時代は貴族の邸宅の寝殿造庭園、平安時代後期以降は浄土系寺院に付随する浄土庭園、鎌倉・室町時代は武家の庭園、禅宗寺院の庭園、書院造りに付随する庭園などがありました。桃山時代の庭園の特徴は、豊臣秀吉による豪華絢爛な石組護岸と景石にみられます。

ここでは、安土桃山時代は室町幕府滅亡から徳川家康が征夷大將軍となり江戸に幕府を開くまで(1573～1603)とし、織田信長が本能寺で明智光秀に襲われて自害する本能寺の変(1582)までを前半、秀吉が天下統一、豊臣家が政権を握っていた時期を後半としました(～1603)。ちなみに美術史では慶長 20 年(1615)の豊臣家滅亡(豊臣秀頼)までを「安土桃山時代」と称するのが一般的です。

京都には平安時代以降、各時代を代表する庭園が存在しており、その中には名勝や史跡などの文化財指定を受けたものがあり、これらは「文化財庭園」と呼ばれています。こうした文化財庭園を後世に引き継ぐために、維持・管理としての手入れだけではなく、池の漏水や護岸の修復といった根本的な修理が必要な事例もあります。近年、そうした整備には歴史的な造園技術が復元されて用いられるようになり、そのため造園技術を解明する手段の一つとして、考古学的手法が採用されています。当研究所は考古学的手法を用いて多くの文化財庭園の発掘調査を行ってきました。今回の講座では、桃山時代の庭園の代表として、また、手探りで始められた初期の文化財庭園調査の実例として、醍醐寺三宝院庭園と、今年度調査が終了した智積院庭園の調査を取り上げます。

醍醐寺三宝院、智積院の両庭園とも現在も桃山時代の姿をとどめ、一般に公開されています。

1 醍醐寺三宝院

三宝院の歴史 京都市伏見区にある三宝院は、真言宗醍醐寺派総本山醍醐寺の子院の一つです。醍醐寺は笠取山上の上醍醐と山裾の下醍醐にあり、寺域一帯は昭和 42 年(1967)に「史跡醍醐寺境内」に指定されました。三宝院は平安時代後期に創建されたと伝えられ、仁王門北東の敷地に仏堂と住房を兼ね備えた建築群と、密教固有の儀式を行なう御堂である灌頂堂かんじょうどうが建てられていました。室町時代前期頃には住房の機能が仁王門北西の金剛輪院(創建は鎌倉時代末)へと移行し、三宝院は灌頂院として存続していました。応仁元年(1467)に始まった応仁・文明の乱による戦火を受けて、三宝院並びに金剛輪院は焼失、その後は衰退の一途をたどり、廃寺同然となってしまいます。安土桃山時代へと移り変わる頃、豊臣秀吉の信任を得ていた第 80 代座主ぎえんの義演(二条晴良の息子、足利義昭あしひの猶子)は、住房である金剛輪院を復興し、醍醐寺伽藍の再興に努めます。醍醐寺の興隆を念じ、三宝(仏・法・僧)にちなんで、後に名称を三宝院と改めました。現在は下醍醐の中樞を担う寺院となっています。

庭の歴史 昭和 2 年、醍醐寺三宝院庭園は「史跡及び名勝」に、昭和 27 年には「特別史跡・特別名勝」に指定されます。そして、平成 6 年(1994)には「古都京都の文化財」の一つとして世界

文化遺産に登録されました。三宝院庭園は、東西棟の殿舎が連なる南側に造られた池泉回遊式の庭園で、豊臣秀吉が縄張りを行なった庭園として名高く、醍醐寺座主義演ぎえんじゆんごうにつきの『義演准后日記』に作庭の経過が事細かく記されていることでも知られています。

慶長 3 年(1598) 2 月、義演は「醍醐の花見」の準備中であつた秀吉を三宝院に案内しました。その際、秀吉が泉水を大変賞美したと義演は記しています。その約 1 週間後、秀吉は三宝院に再度訪れ、自ら庭造りを指揮することを決め、翌年の後陽成天皇行幸予定に合わせて 4 月から工事を開始しました。庭の縄張りを行なった翌日には、謡曲「藤戸」にも謡われた藤戸石を聚楽第から運び込み、5 月半ばには庭を完成させました(日記 1・2)。殿舎の造営も 5 月から始まり、8 月に秀吉が亡くなったため一時中断しましたが、北政所の援助によって再開され、12 月には大部分が完成しました。その後、慶長 4 年から元和 10 年(1624)までの 26 年もの間、義演は熱心に庭の改築を続け、現在に近い三宝院庭園が完成しました。

庭園の調査 保存修理事業にともなって、平成 14～20 年度(1～7 次調査)は園池、平成 21～24 年度(8～11 次調査)は築山や園路の調査を行いました(図 1・表 1)。調査では、桃山時代から江戸時代前期の護岸施工法が明らかになりました。この庭園の特徴は、陸部の土が流出するのを防ぐために置かれた護岸石を池底に直接据えるのではなく、版築はんちく(土を叩き締めながら積み上げる)した陸部上てんばに天端石(最上部の護岸石)底部を置き、その下部の土が露出した部分は、覆うように別の石をひな壇状に積む工法を採用していることです。そして最下部には地滑り防止用の留石が、池底の地中に埋め込まれていました。(図 3)

現在の池は室町時代の池跡を壊して造られたことが、調査で確認されました。陸部を広げるために古い池の護岸を埋め戻し、その一方で、古い池底を更に掘り下げていたことが分かっています。この工事によって、深いところで 1.5 m を測る庭園としては特異な深さの池となりました。

主な調査の成果

1 次調査の成果 ①旧護岸や池跡を検出しました。北岸の陸部の一部(1～3 トレンチ)は古い池を埋め立て、土を積み上げて造られたことが明らかになりました。この古い池(池 11)は三宝院前身の室町時代に造営された金剛輪院の庭園の池と思われます(図 2)。②天端石の据え方、護岸の施工方法が判明しました。陸部に天端石の底部の半分から 1/3 程度置き、残りは池底から積まれた石の上に置かれ、積石は天端石の支え及び陸部の擁護壁であることが判明しました。(写真 1)

2 次調査の成果 岬状部分の一部が池を埋めて拡張したものであること、亀島が礫と土を突き固めて造られていることが明らかになりました。

3 次調査の成果 ①池尻部分から旧排水施設を検出しました。池内では、それにつながる東西方向の溝を検出しました。(写真 2、図 5・6) ②北岸天端石下で、中世の石組井戸を検出しました。『義演准后日記』には「古井戸」の記述がありますが、この井戸かどうかは判断できません(日記 3、図 4)。

4 次調査の成果 東西方向の現排水溝の下から、旧排水として使用されていた土管を検出しました(図 6)。この土管が 3 次調査で検出した旧排水施設の木樋もくひに連結した部分を検出しました。

5 次調査の成果 池底から直径 0.9 m の桶の西半部を検出しました。深さは約 0.22 m、材質はヒノキです。

6 次調査の成果 池に雨水を排水する施設を検出しました。また、護岸は積石をもたない施工をしており、建物南側の池との違いが判明しました。

7 次調査の成果 3・4 次調査で見つかった排水施設の木樋・支柱・木栓・支柱を取り上げ、保存処理をし、保管することになりました。材質は木樋は松、蓋は檜、木栓は杉材、支柱は杉でした。排水施設の構造・工法の一部を明らかにしました。水受け部分は、石積み、漆喰、モルタルによる

3段階の構造を経るものでした(図5、日記4)。

8次調査から11次調査は、池南側と西側の築山、唐門前の園路を中心に調査を行いました。8次調査の西築山部では新たな景石を検出しました。

10・11次調査の唐門前の園路では、園路の両側に溝状の落ちがあることが判明しました。さらに土手状の高まりを検出しました。

2 智積院

智積院の歴史 京都市東山区にある智積院は、もとは紀州根来山大伝法院の塔頭でした。大治5年(1130)に興教大師覚鑿上人が高野山に伝法院を創建しますが、教義上の対立から覚鑿は、保延6年(1140)に高野山から根来山へ移り、真義真言宗を開創、正應元年(1288)には再び対立から紀州豊福寺に移転し、根来寺を創建しました。天正13年(1533)、天下統一を図る豊臣秀吉により根来寺が焼け払われ、智積院玄宥は高野山、京都へと衆徒と共に移り、秀吉が没した後の慶長3年(1598)、玄宥は徳川家康に根来寺の再興を請願し、元和元年(1615)までに数回寺領を与えられ、智積院は復興しました。家康が与えた寺領は、秀吉縁の豊国神社の付属寺院や、さらに秀吉が夭折した実子鶴松の菩提のために建立した祥雲寺の土地・建物です。智積院は祥雲寺の堂宇、庭園をそのまま受け継ぎ、寛文5年(1665)、第七世運徹により堂塔伽藍の整備や庭園の修復が行われます。しかし、天和2年(1682)の火災を始めとし、数度の火災と再建を繰り返しました。庭園は昭和20年に国の名勝に指定されますが、昭和22年には庭園周辺の建物(方丈・宸殿・大書院)が再び火災により焼失し、半焼であった大書院はその後復元されます。

平成4年、焼失した方丈跡地に講堂が建設されることとなり、発掘調査が行われ、祥雲寺客殿の遺構が検出されました。

庭園の調査 保存修理事業に伴い平成22年度から28年度にかけて考古学的調査を行いました。調査の目的は、経年変化により堆積した土層の確認、造成基盤・盛土基盤の確認、地割の明確化、築山・園路の構造確認、庭園を構成する基本土層の確認、池底と陸部の地形の繋がり、護岸や景石の崩落や毀損箇所の確認、護岸の構造の確認、庭園の改変の有無などを明らかにするために行いました。調査では、築山や陸部の基本となる層や、池底が自然堆積層である粘土層(大阪層群)を利用していること、昭和22年火災で焼失する以前の建物跡、大書院が西側へ移動していた痕跡、池の一部が埋められていたことなど、庭園の基本構造や改変の有無を明らかにしました。

主な調査の成果

1次調査の成果 1-4地点で土師器皿の埋納土坑を確認しました。地鎮もしくは儀式に用いたものと考えられます。1-7では現存の池に続く溝状の遺構を検出しました。

2次調査の成果 池内全域で青灰色系粘土を確認し、池底が不透水性の自然堆積とみられる青灰色系粘土を基盤層としていることを確認しました。2-8地点では、3段の石積み新たに確認しました。

3次調査の成果 護岸は新旧2時期あり、現在の石積み護岸以前に、横板や胴木を杭で留める護岸があったことが確認できました(写真3)。

4次調査の成果 東側護岸は、池底から続く地山直上に粘土を貼り、礫を敷いてから護岸石を据えていること、場所によっては胴木を置いて護岸石を据えていることが判明した。石橋南東部の護岸は背後にもう一面護岸のある二重護岸で、改築の痕跡が認められないことから、当初からの意匠であったと考えられます(写真5、図10)。池西側と排水溝北東部の護岸は、新旧2時期あり、現在

の石積み護岸以前に、木の護岸があったことが確認できました(図9)。流末の排水溝の高さは、14cmかさ上げされていることが確認できました。

5次調査の成果 5-1地点では、昭和22年に火災で焼失した旧宸殿の礎石列を検出しました。5-6地点では、溝底面に平瓦や石を敷いた石組み溝を検出した。5-9地点の池西端部では、埋められていた池の西延長を確認しました。

6次調査の成果 東山裾部で溝を検出しました。6-4地点では、柱の根固を2基、重なった状態で検出しました。昭和22年の火災後に大書院が西に移動された時のものと移動前の根固めと判明しました。6-7地点では、園路で埋没した踏石を検出しました。5次調査の石組溝が東築山裾部の雨水排水施設であることが判明しました。

7次調査の成果 7-1~4地点では、大書院縁下の護岸構築状況と洗掘による毀損部分を確認しました(図12)。護岸は当初から改変されていないことが判明しました。7-3地点では、コンクリートの独立基礎を検出しました。7-5地点では築山景石の傾倒状況を断面から明らかにすることができました。7-6地点では、滝流底のモルタル下地の構造を確認しました。

参考文献

『特別史跡及び特別名勝醍醐寺三宝院庭園保存修理事業報告書Ⅰ(園池編)』宗教法人醍醐寺 平成23年
『特別史跡及び特別名勝醍醐寺三宝院庭園保存修理事業報告書Ⅱ(植栽・築山・茶室編)』宗教法人醍醐寺 平成26年

吉永義信 「日本庭園史 一昭和初期ころの回想一」『醍醐寺三宝院庭園』(株)小学館

『総本山智積院境内 祥雲寺客殿跡の発掘調査』総本山智積院

重森三玲 「日本庭園史図鑑 江戸時代初期二」『智積院庭園』有光社

【参考】

『義演准后日記』文禄5年(1596)から寛永3年(1626)までの約31年間つづられた日記。

[日記1] 慶長三年四月七日 雨灑及晩屬晴 金剛輪院泉水今日太閤御所ヨリ奉行新庄越前其外衆兩人来ナワハリ致之、

(秀吉は庭奉行として新庄越前守直定ほか二人を初めて金剛輪院におくり、縄張りをした。)

[日記2] 慶長三年四月九日 晴 金剛輪院泉水へフダト大石今日居了、主人石ニ用之、奉行新庄越前、此外大石三ツ立之、手傳三百人衆、

(庭奉行のもとに藤戸石を主人石に用い、その他大石3石を立てた。)

[日記3] 元和九年八月廿九日 晴 泉水南正面ノ小嶋今夜崩、土モ石モニエ入畢、古井ノ跡也、先如形土ヲ突入畢、

(小島を古井戸の上に造ったため、崩落したため、井戸に土を突き入れた。)

[日記4] 元和十年正月廿八日 泉水ノ樋用意、小鴨一池へ放、
元和十年正月廿九日 泉水西ノ築地石クラヲ堀テ樋入、



図1 三宝院調査区位置図(1:400)

表1 三宝院調査一覧表

調査回数 (年度)	調査期間	調査方法	面積 (㎡)	調査区	調査概要
第1次 (H14)	2002年12月9日～ 2002年12月27日	発掘	17	1トレンチ	近世初頭の整地層および室町時代の旧池護岸を検出。
				2トレンチ	近世初頭の整地層を検出。
				3トレンチ	室町時代の旧池堆積土を検出。
				4トレンチ	昭和の修復時の掘形を確認。
	2003年2月19日～ 2003年3月11日	立会	-	北岸	天端石の据え付け方法が判明。
第2次 (H15)	2003年7月24日～ 2003年8月29日	発掘・ 立会	8.5	5トレンチ	昭和58年度工事の際に並べられた石列を検出。岬部分はある段階で盛土が行われて拡張されたことを確認。
				6トレンチ	昭和58年度工事の際に並べられた石列を検出。亀島は礫と土を突き固めて造られていることが判明。
				7トレンチ	岬部拡張以前の池の堆積土を確認。
	2004年2月2日～ 2003年3月4日	立会	-	亀島、北岸	亀島の構築土、岬部分の構造などが判明。
第3次 (H16)	2004年12月17日～ 2005年3月4日	試掘 立会	8.7	8トレンチ	旧表土および昭和58年度工事の掘形を確認。
				9トレンチ	旧表土および昭和58年度工事の掘形を確認。
				南・北・ 西・東岸、	北岸天端石下で中世とみられる円形石組井戸、池尻で旧排水施設を検出。この施設東側に東西方向の排水溝がなっていることが判明。
第4次 (H17)	2005年12月14日～ 2006年2月28日	試掘 立会	7	10トレンチ	現排水溝下に、土管が埋められていることが判明。木樋は旧排水施設から水門直下までであったことを確認。
				11トレンチ	10トレンチから続く土管を検出。
				南岸、 旧排水施設	木樋東側では何度も改修が行われていたことを確認。南岸では東と西で大きく土層が異なることが判明。
第5次 (H18)	2006年12月19日～ 2007年2月27日	確認 立会	0.9	12トレンチ	旧排水施設東側から続く排水溝埋土とみられる土層を確認。
				13トレンチ	旧排水施設東側から続く排水溝埋土とみられる土層を確認。
				14トレンチ	古い時期の池底と南北方向の溝状遺構を検出。
				東岸	北東付近の池底で、留石を据え付けたとみられる痕跡を確認。
第6次 (H19)	2008年1月8日～ 2008年2月26日	確認 立会	-	三段の滝 (C滝)	滝口石裏面の下層で造成基盤とみられる固い層をボーリング棒で確認。
				純浄観下～ 北、入江	純浄観下～北では江戸時代の瓦を含む整地層や、池が造られた時期より古い化粧砂、江戸時代末以降の雨水排水遺構を検出。
第7次 (H20)	2008年12月18日～ 2009年3月31日	確認・ 立会	-	A・B・ C滝、 旧排水施設	A・C滝のコンクリートを剥がし、安定した整地面を確認。旧排水施設では支柱掘形などを確認。
第8次 (H21)	2010年1月18日～ 2010年3月31日	発掘・ 立会	13	1地点	築山の下段に昭和58年度の修復箇所を確認した。
				2地点	安定した基盤層を確認した。
				3地点	陸部が礫敷であった可能性を確認した。
				4地点	表土下に現代廃棄物を多量に混入した層を確認した。
				5地点	基盤層に据えられた新たな景石を検出した。
				6～9地点	築山構築土層を確認した。
第9次 (H22)	2011年1月25日～ 2011年2月16日	発掘・ 立会	20	1～3・6	基盤層を確認した。
				4地点	礫を多く含む落込みを検出した。
				5地点	景石の周囲に樹根による攪拌を確認した。
				7～9地点	築山構築土層を確認した。
第10次 (H23)	2012年1月18日～ 2012年2月23日	発掘・ 立会	10.7	1～3地点	安定した基盤層を確認、1・2地点は園路脇で土手状高まりを検出した。
				4地点	築山基盤層を確認した。瓦を多量に含む層を検出した。
				5・6地点	土手状の高まりと落込みを検出した。
第11次 (H24)	2013年3月7日～ 2013年3月14日	発掘・ 立会	4.4	1地点	表土下に版築状の土層を確認した。高まりと溝状落込みを検出した。
				2・3地点	土手状の高まりと溝状落込みを検出した。落込みから近世以降の瓦が多量に出土した。

写真1 池護岸の天端石と積石



図2 1次調査 旧池実測図(1:100)

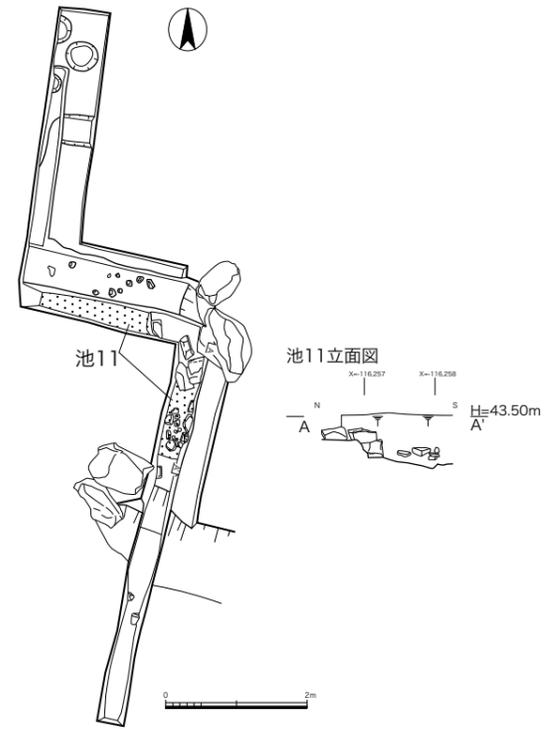


図3 池護岸構造模式図

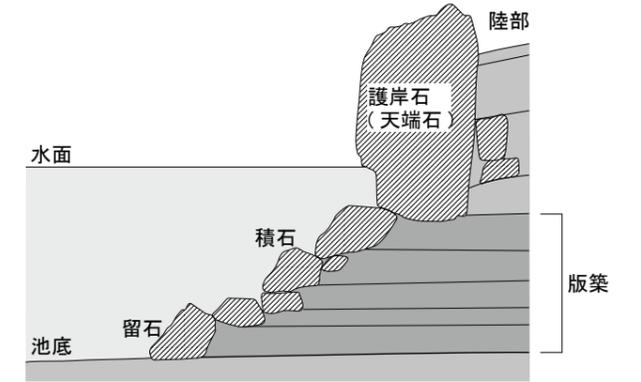


図4 3次調査 井戸実測図(1:80)

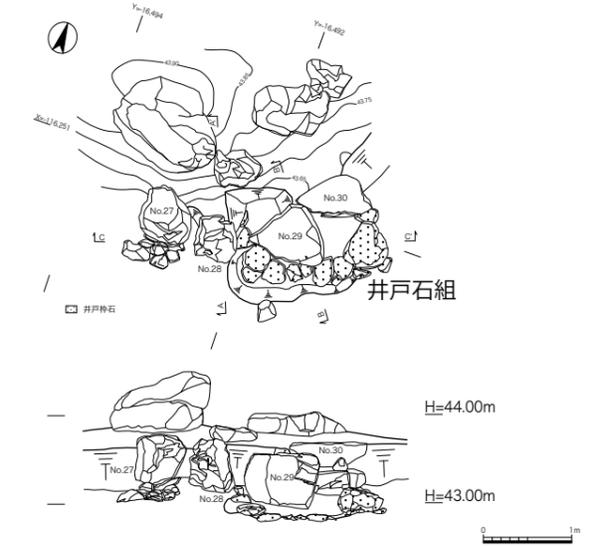


図6 庭園西土塀西側立面図(1:80)

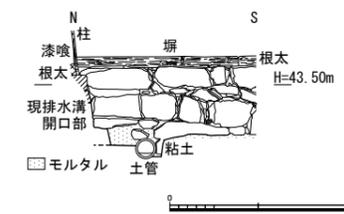
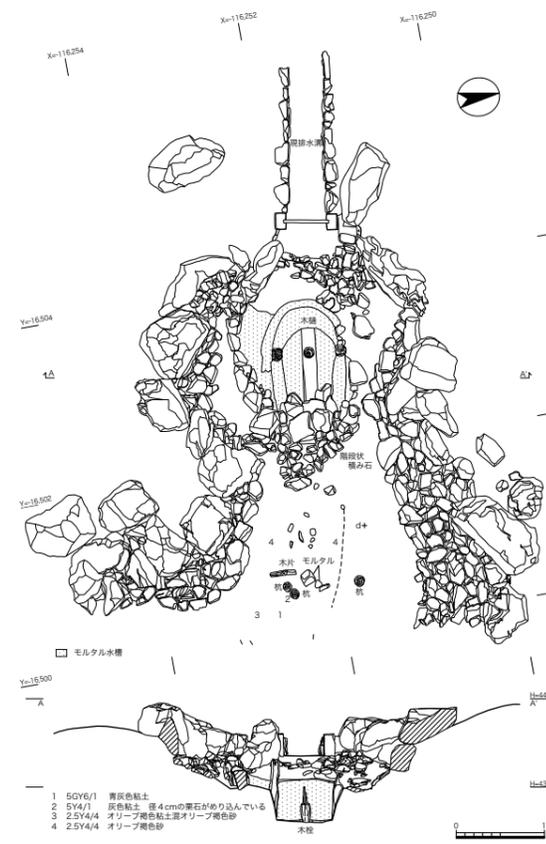


写真2 旧排水施設



図5 旧排水施設実測図(1:80)



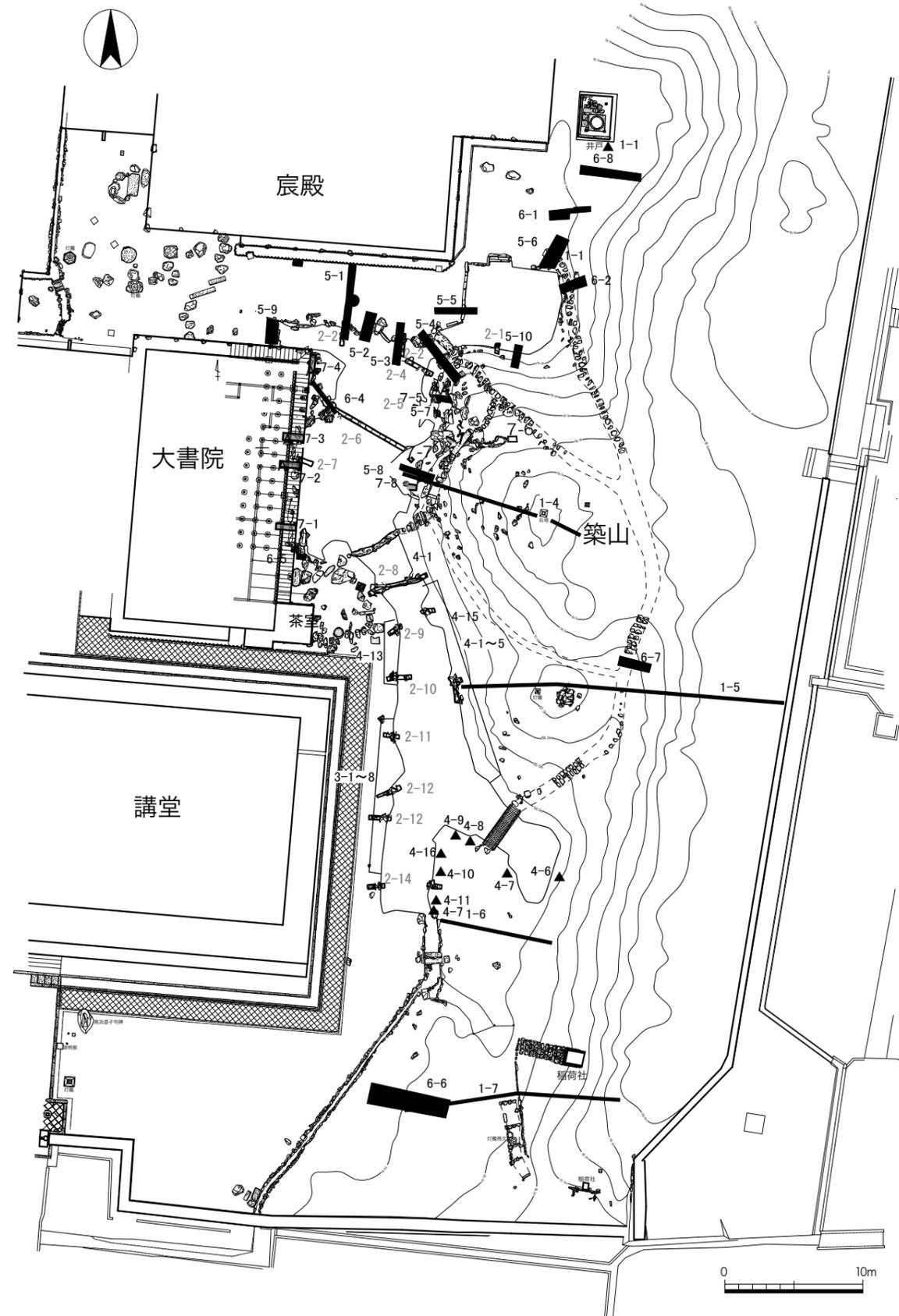


図7 智積院調査区位置図 (1:400)

表2 智積院調査一覧表

調査回数 (年度)	調査期間	面積 (㎡)	調査区	調査概要
第1次 (H22)	2011年3月1日～ 2011年3月18日	17	1地点	排水施設と石組溝を検出した。
			4地点	石塔南東部で江戸時代前期の土師器皿の埋納土坑を検出。
			5地点	外縁部築地際で瓦敷遺構を検出。
			6地点	基盤層を確認、池護岸石の背面に漏水漏水箇所を確認。
			7地点	近代以降の瓦を含む幅2m以上の溝状を検出。
第2次 (H23)	2012年1月10日～ 2012年2月6日	11	1地点	近年の修復箇所と池底面の基盤となる粘土層を確認。
			2地点	護岸石下で粘土採掘土坑を検出。
			3～5地点	池底面の基盤となる粘土層を確認。5地点では大石が前面に傾倒した状況を確認。
			6・7地点	粘土と粗砂層の互層の版築された整地層を検出。
			8地点	3段の新たな石積みを確認。
			9・13地点	池底と粘土・粗砂層の互層で版築された整地層を検出。
			10・14地点	池底面に据えた胴木(横木材)を2本検出。
			11地点	裏込めに打ち込まれた木杭を検出。
12地点	護岸石前と裏込めに打ち込まれた木杭を検出。			
第3次 (H24)	2013年1月28日～ 2013年2月7日	9	1～7地点	護岸が新旧2時期あり、石積み護岸以前に横木や胴木を杭で留める護岸であったことを確認した。
			8地点	景石が新しい時期の盛土に据えられたことを確認。
第4次 (H25)	2014年1月14日～ 2014年2月10日	12	1地点	護岸が二重護岸であることを確認。
			2～5・7地点	護岸に胴木や胴木を止める杭を検出。
			6・9・15地点	護岸石裏込め、整地層を確認。
			8地点	旧橋脚の木杭を検出。
			10・11・13・ 16地点	護岸が新旧2時期あり、石積み護岸以前に横木や胴木を杭で留める護岸であったことを確認した。
			12地点	新旧2時期の護岸裏込めを検出。
14地点	近年の改修以前の排水溝を検出。			
第5次 (H26)	2015年1月7日～ 2015年1月26日	14.7	1地点	旧宸殿の礎石列を検出。
			2～4・7・ 8地点	築山構築土、整地土、池底を確認。
			5地点	石組の最下層から胴木を検出。
			6地点	石組溝を検出。
			9地点	旧池を確認した。
10地点	近年の修理箇所を確認した。			
第6次 (H27)	2016年1月12日～ 2016年1月27日	13	1・8地点	東側築山裾部で雨水排水溝を検出。
			2・7地点	築山構築土、整地層、基盤層を検出。
			3地点	池底に礫を敷き詰めた層を確認。
			4地点	大書院の新旧の柱根固めを確認。
			5地点	昭和22年度の火災後の整地層を検出。
			6地点	古図に描かれている旧排水路は確認できず。
第7次 (H28)	2017年1月16日～ 2017年2月1日	3	1～4地点	大書院下の護岸構築状況と毀損部分を確認。3地点はコンクリート独立基礎を検出
			5地点	景石の傾倒状況を確認。
			6地点	滝流底の構造を確認。

写真3 3-7 調査 横木検出状況



写真4 5-1 調査 礎石列検出状況



智積院資料 2

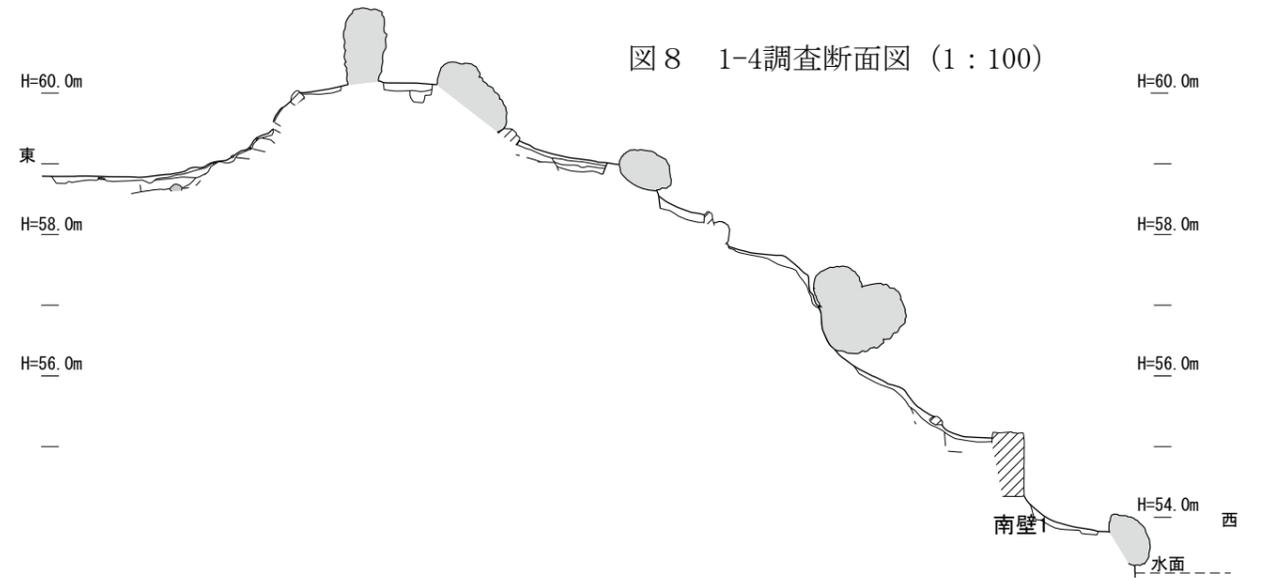


写真5 4次調査 二重護岸の石組検出状況



図9 4-10調査実測図 (1:20)

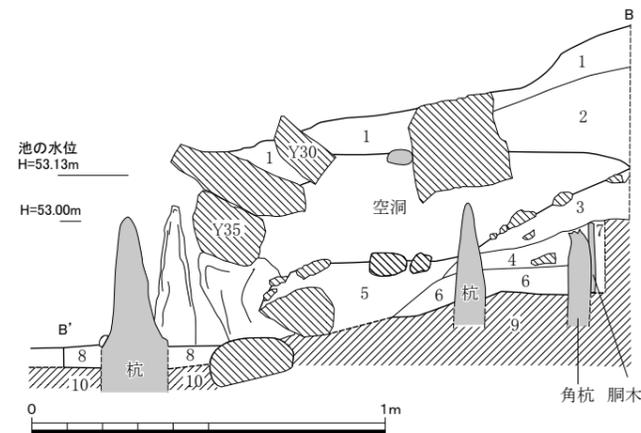


図10 4-1調査実測図 (1:20)

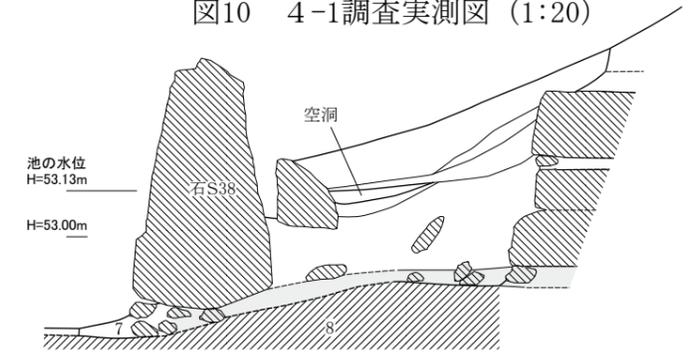


図11 5-1 調査実測図 (1:40)

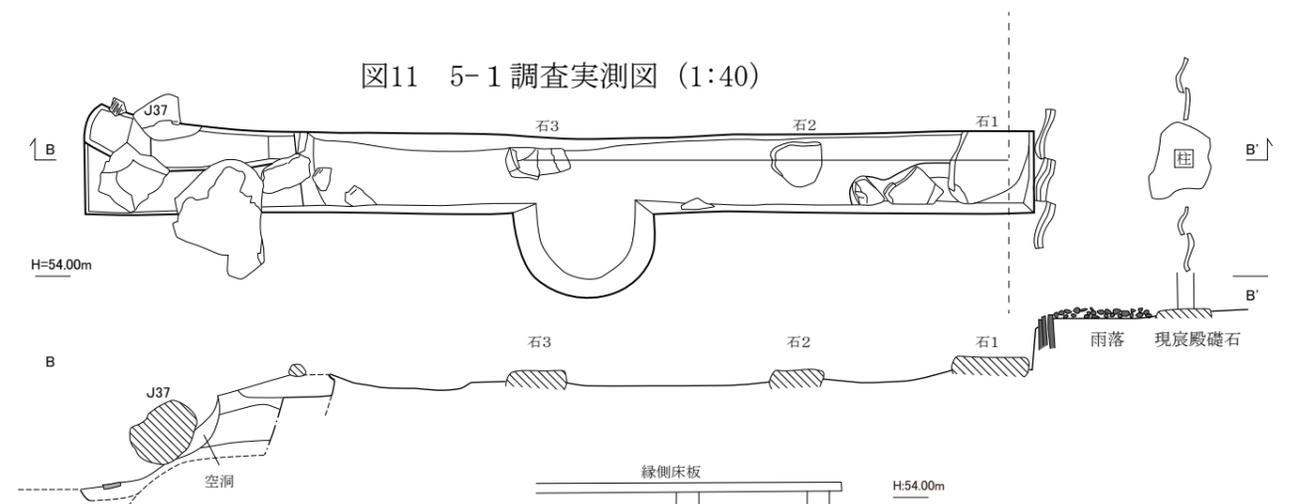


図12 7-4 調査実測図 (1:40)

